

地元の協力によつて、現年、宍石の難工事も人カと機械力に任せられ、久しい夢であつた希望の隧道開鑿を完成させた。

続いて、隧道下の水路の改修と完成するなど、組合員の増産意欲は、常に困難に堪え、遂に不可能と可能とした。

今日我々が、心おきなく増産に励むことのできることを考へると、実に感慨無量である。

昭和二十四年八月、土地改良法が制定されたので、常盤井路耕地組合を改組し、常盤井路土地改良区とした。茲に記念碑建設に当たり、事業の概要を記録し、後世に次す。

常盤井路は、文化十年(一八一三)、佐伯藩主十代毛利高翰の時、藩士田原親興、切畑村大庄屋出納藤左衛門等が計画により、堰を番匠川の上流中野村溝に設けて、水門を東方に開き、農業用水を切畑村大字門田宮真弓鶴まで流れるようにしました。その結果、大字細田・平井・門田部落は、積年の旱害を一掃することができました。この井路の長さは一里拾八町余に及んでいます。文化十一年七月着工、文政元年(一八一八)五月完成、四年ばかりの大工事でした。

「岩石ノ上ニ薪炭ヲ積ミ、之ヲ燒キテ僅カニ破砕セシニ過ギズ、多クハ鑿ヲ以テ穿チシモノナリ。人夫一人一日ニ石屑一升ヲ掘リ得ル者ヲ以テ一等工夫トナシタリト」

「朝ニ星ヲ戴キ、夕ニ月ヲ踏ミ、苦辛慘憺ヲ極メタリ」
「夫役券万余人、経費券拾七貫二百二分五厘(内拾二貫二百三分余ハ出納藤左衛門ノ自弁)」
と記録二載つています。

まさに、常盤井路隧道は、佐伯藩の「青の洞門」と云つてよいでしょう。
当時の刻苦勉勵、不撓不屈の精神は、頭が下がりません。
(古わり)

おしらせ

萬葉歌碑「白水郎歌」建設

佐生所に歌碑の語が進んでいる

万葉集卷十六にある豊後白水郎の歌について、東京の御手洗一而会員の書いたものがある。

豊後國白水郎歌一首

紅尔 深而之衣 雨零而 尔保比波雖為 移波水也毛

紅尔 深而之衣 雨零而 尔保比波雖為 移波水也毛

移波水也毛

歌が大意はこうである。

「いったん紅に染めた着物は、たとえ雨にあって、色が美しくなることはあつても、色があせるといふことがありましようか、そんなことはありません」

この「白水郎の歌」と石に刻んだ万葉歌碑を、今建設する方向で語が進んでいると聞く。

佐生所は佐伯市に次いで以前から歌人が多かつたが、最近成高会者の短歌教室が旺んである。わが史談会員の中には佐生所の短歌会員が数名ある。うれしい話である。

依伯には文字碑が少くない。僅か五指を屈す位しかない。その位文字が貧困なのであるうか。否と答へたい。
文字を大事に思ひ、詩や歌や俳句を身近におき、生活の中に入り入れる努力が足りないのではなかうか。